

これからの幸せ 第9回 in 大阪

2024年11月12日(火) 大阪市中央公会堂 大集会室 | 主催 浄土宗 後援 読売新聞社

第一部 講演

IKKO(美容家)

第二部 座談

三代澤康司(ラジオパーソナリティー)
 光誉祐華(西迎院副住職、元・愛\$菩薩)
 戸松義晴(浄土宗総合研究所副所長)※コメンテーター
 笑い飯・哲夫(漫才師)※司会進行



「今聞こえる響き」に耳を傾ける (IKKOさん)

第一部の講演は、様々なメディアでも活躍する“カリスマ美容家”IKKOさん。「どんだけどんだけ、どんだけ〜！」と叫んで華やかに登場したIKKOさんですが、いくつもの壁にぶつかり、そして乗り越えてきた半生…。39歳のとき、重度のパニック障害で倒れた際の話から始まります。
 「すべての運が私から遠ざかったようでした。でも十分時間ができたのだから、懐かしい故郷を見ようと帰省しました」
 自筆の書「山の音 海の音」をスクリーンに映してIKKOさんは語ります。「亡くなった

父と登った懐かしい山へ登ると、空気に音がある、山に音があると気づきました。休む間もなく働いていたころは、それに気づく感性を失っていた。忙しいという字は『心を亡くす』と書きますが、まさにそんな私だったんですね。人生で大切なのは、過去や未来をあれこれ考えずに、『今聞こえる響き』に耳を傾けることだと思いました」



そんなときにIKKOさんを支えてくれたのは「音」。たとえばかつてヘアメイクを担当した島津亜矢さんの演歌でした。その地響きのような歌声に、なんでもはね除けられそうな勇気をもたらったといいます。
 他に何曲も「自分のスイッチを入れる」曲を用意して、聴き分けているそうです。
 客席との質疑応答を経て、自筆の書「笑福寿」が投影されると、拍手喝采のうちに話を終えました。

人生は変わる。ちょっとした心の持ちようで (IKKOさん)

そして、「これからどうやって幸せをつかめばいいか」と考えたとき、3つの言葉が自然に出たといいます。1つは「川の流れるように」。焦っても焦らなくても時間は過ぎていく。2つめは「福」。この文字を台所に貼って作った料理を食べれば、身体の中に福が舞い込んで来ると考えました。
 そして「笑門」。「この2文字はトイレに貼りました。イヤなことは水に流して、笑うことが

大切と考えたんです。『笑門来福』と、いいますよね」
 そうしているうちに、初めてテレビの密着取材が舞い込んで、そこから「メディアで活躍するIKKOさん」が始まります。人気上がるにつれ、こんな言葉がよりどころになったそうです。「人生は変わる。ちょっとした心の持ちようで」。
 「人間の心には、たくさんの感情が渦巻いていて、しかも山の天気のように変わりやすい。それを受止め、相手を変えるには、心の余裕とやさしさだと思いました」
 そのため、ご自身の部屋を「自分をもっと自分らしくいられる場所」にデザインして、「今、目に映る景色を心地よくする」ことを始めました。
 「私は花を飾ることを大切にしています。花には“色のオーラ”があります。ピンクが好きなのに、濁った違う色にアタマが占められていたら、危険のサインです」



「発見」が幸せにつながる (三代澤さん)

第二部は座談。朝の長寿ラジオ番組「ドッキリハッキリ!三代澤康司です」でお馴染みの三代澤さんは、「発見」が幸せに繋がる、と語りだします。
 会うたびに「今が一番幸せや」と繰り返す98歳のお父様は、毎日10人以上の人としゃべる、という目標を自分に課していると言います。道を歩いている人、スーパーの店員さん…「10人としゃべると、色々な発見があって楽しいよ」と。
 三代澤さんも仕事柄、新聞9紙を毎朝読むそうですが、「こなす」のではつまらない。「毎日新鮮な気持ちでいなければいけないし、好奇心を忘れないことだと思います」
 孫と海に行ったとき、小さな蟹を発見して、これ以上ない笑顔で喜んだのを見て、



自分もどれだけ嬉しかったか、と語る三代澤さん。「発見は毎日の中でいくらかでもあります。それをどれだけ新鮮な気持ちで喜べるか。『これからの幸せ』へむけて、そんな歩みを続けてゆきたい」と語りました。

他者の幸せを願うことが「これからの幸せ」(光誉さん)

かつて「愛\$菩薩」と称し、今も歌と法話のライブ活動を続ける光誉祐華さんは、近所で見た七夕の短冊のお話から。
 「お金のこと、健康のこと、家庭のことなど、色々な願い事が書かれています。『願い』には限りがありません。自分の欲だけを求めていると、いつまでも満たされる

ことがなく、そのことで、逆に苦しくなってきます」
 「世間の喜び」に対して、仏教には「出・世間の喜び」と言います。
 「仏様の教えに出会い、その教えを行じることが喜びに繋がります」
 慈悲によって衆生の苦しみを除き、生きとし生けるものに樂を与えることを「拔苦与樂」といいます。
 「人の喜びを自分の喜びとし、人の悲しみに寄り添うのが慈悲の心。今を生き、お念仏によって極樂浄土に生まれる私が、他者の幸せを願い、慈悲の心で生きていくことが、私にとっての『これからの幸せ』」と語りました。



「ありのままの自分」で幸せになる (戸松さん)



戸松義晴さんがコメントします。
 「IKKOさんの、日常から離れる中で『音』を再発見し、本来の自分に立ち戻り、やがて感謝の心につながっていったお話が印象的でしたが、三代澤さんも、同じく『発見』がテーマでした。98歳のお父様の感動する心が素晴らしいですね。仏の慈悲である『拔苦与樂』を日常の中で実践していきたい、という光誉さんの思いにも心打たれました」
 哲夫さんが「今日のキーワードは『発見』でした」と三代澤さんに振ると、「うちの父は100歳を越すと思いますが、その基本は『好奇心』と『発見』。私も父にあやかって頑張りたいと思います」
 光誉さんは「三代澤さんが、お孫さんの話に続けて『若い人の幸せを願って生きた

い』と言われましたが、私も自分だけでなく、周りの人の幸せを願って生きていきたい」と語ります。
 戸松さんがまとめます。
 「南無阿彌陀仏のお念仏で救われる、といいますが、救ってくださるのは自分ではなく阿彌陀様です。ですからみなさんは、ありのままの自分で救われる、笑顔になれる、幸せになれるんだということを、あらためて『発見』してほしいと思います」
 京都、東京、福岡、仙台、札幌、名古屋、広島、金沢そして大阪…2年間で全国9か所を巡回した法然フォーラムは、恒例のフィナーレ曲“On the Sunny Side of the Street”の軽やかな響きとともに、幸せなお被樂喜を迎えました。

